



志度高だより 一飛翔の窓一

第91号
(H22.4.19)

「育てるには……」

校長室前の窓際で鉢植えのパンジーを育てていた。昨年十二月に買って来た苗をポットに植えたものである。何とか越冬し現在に至ったが、途中で寒さのため何度か枯れそうになった。パンジーはもともと寒さに強いはず。それでも校長室の寒さは半端ではなかったらしい。

春先になってようやく葉っぱも勢いを盛り返し、厚みが出てきた。しかし花が……。葉の間に二つ三つ顔を覗かせるものの、どうしたものかパッと咲かない。何かに遠慮したように中途半端なのである。一方、中庭の花壇にじか植えしたパンジーは、どんどん大きくなって花の数も多い。実に伸びやかで華やかだ。プランターでもパンジーを育てているが、これも花壇と同じく伸び伸びとして元気いっぱい。

もしや、と思い、パンジーを鉢から抜き取り、プランターに植え替えた。するとどうだろう。三日ぐらいすると、なんとパンジーの花が見事に咲いているのではないか。それに小さな花もどんどん葉の間から顔を出している。

やっぱりな。植物というのは、本来鉢などに植えて育てるものではないのだ。植物だって窮屈な思いをすれば、ストレスが溜まる。自由でのびのび。これが一番。その証拠に、窮屈な思いをしていた鉢植えのパンジーが、あんなに伸びやかに花をつけているのではないか。「育てる」というのは、適当な日光と水と栄養、それに適当な器、つまり環境が必要なのだ。



これを人間に当てはめてみるとどうだろう。やっぱり同じことが言える。適度の滋養と愛情、それと文化的で健康な環境となる。現代は「満ち足りすぎて不幸な時代」。子どもたちを包む器はどうか。小さくて狭い。そのくせ外的誘惑と干渉は多い。世界がグローバル化するのに、日本では子どもを育てる器が逆に小さくなっている。教育の視点をどこに置くか、それが欧米諸国と根本的に違う。教育は国の礎。子どもたちは未来の宝。そう考えれば、おのずと進む道は見えてくるはずなのだが……。予算がないからと教育費を削減する。これはどういうことだ。教育は国家的事業だ。もっと教育環境を整備し、子どもを愛情をもって厳しく鍛えるべし。ひ弱のもやし、そのうえ生きる智恵、力、技術なしでは、国を背負ったとたんに肋骨と背骨がポキリ。これじゃあ国を背負うどころか、年老いた親さえ背負えない。こぢんまりした器でこぢんまりした人間を育てることが悪いとは言わない。盆栽のように小さくても宇宙の広がりを持つものもある。だからと言って、最初から子どもたちを小さな器に入れていいものか。いくら栄養をやっても、小さな器ではそれに似合ったものしか育たない。鉢植えのパンジーがいい例である。子どもたちの可能性の選択肢が狭められると、おのずと未来図も小さくなる。夢はでっかくだ。行動範囲も広くだ。少しくらいハッターをきかすくらいでちょうどいいのだ。



もう一つ。香川県が生んだ著名なバイオリン奏者である川井郁子さんの話である。彼女はバイオリンに興味を持ち、両親に買ってほしいと言った。ところが両親は、うん、とは言わなかった。彼女はバイオリンが弾きたくて仕方ない。それなのにバイオリンがない。彼女は子どもながら悶々とした毎日を過ごす。ところが、思いがけずバイオリンを手になることになる。それも普通の日ではなくクリスマスという特別な日に。彼女の喜びたるや想像に難くない。両親の思慮深さに、私は、うん、と唸ってしまった。何と言って彼女にバイオリンを渡したか知らないが、その言葉も正鵠を得たものに違いなかっただろう。子どもの心を読みながらの、どんびしゃのタイミング。言うまでもなく、川井さんはそのバイオリンをこよなく愛し、人一倍練習に励んだ。そして押しも押されぬバイオリン奏者になった。

今、春の花が美しい。つい歩を止め、その美しさに見とれてしまう。我々人間誰しも一生に一度は花を咲かせたいと願っている。人それぞれの花を。ただしその花を咲かせるにはいろいろな条件があり、また準備も必要である。子供時代にどんな器に入れられるか、どんな栄養をもらい、どう育てられるか。これは咲かせる花に大きく影響する。形は悪くてもいい。目を見張る色でなくてもいい。芳しくなくてもいい。これが俺の咲かせたでっかい花だ、と胸を張って言えれば。

最後に一言。私はコスモスとスイートピーが好きである。因みにコスモスの花言葉は、乙女のまごころ、野性美、調和。スイートピーは、別離、思い出、私を覚えていて。